

Title	「重層性のある社会」の実現に向けて : アートエリア B1 の活動を通して
Author(s)	大浅田, 寛
Citation	Communication-Design. 2010, 3, p. 138-139
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6532
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「重層性のある社会」の実現に向けて ～アートエリアB1の活動を通して～

京阪電気鉄道株式会社 経営統括室

大浅田 寛

平日夕方の京阪電車なにわ橋駅地下1階コンコース。会社帰りのサラリーマンや学生がひとりまたひとり姿を見せ、やがて思い思いに自分の考えを語り出し、対話が繰り広げられる。アートや哲学、鉄道について。また、時には駅であることを忘れるような魂のこもった作品が展示される。そこは世界的にも珍しい、駅のコミュニケーション空間「アートエリアB1」。

アートエリアB1では、2008年の中之島線開業時から、CSCDと京阪電車とが社学連携という形で、NPO法人ダンスボックス、NPO法人 recip とともに、アートや大学の知、地域の活力を結集して都市空間での駅の新たな可能性を実験している。

なにわ橋駅の建設途中から、既にCSCD中心となって、カフェトークやダンスがイベント的に建設現場で行われていた。私は駅部門の企画担当者として、駅構内にこれらを常時実施できる空間を検討する段からこのプロジェクトに携わった。失礼

ながら大学と一緒に取り組むことに対して当初は疑心暗鬼だった。企業人と違い、大学は浮世離れた、採算よりも理論や理想を追求する集団、まさに「象牙の塔」だと勝手に思い込んでいたのである。しかし、それはよい形で予想を裏切られる。CSCDのメンバーは皆、豊富な社会経験を持ち、実務をこなすスキルを十分に備えた面々なのだ。企業人の思いも理解しつつ、一方で組織や予算に束縛された企業人ではできない発想や専門的な知識を武器にその饒舌さと高いコミュニケーション能力で、企画を形にしていく。

アートエリアB1は、建設中から、そして今も、常に進化を目指し、所属も履歴も個々に異なる運営メンバーが毎週ミーティングを開き、運営や企画について熱く討論している。お客さまがいるプログラムでも、運営メンバーだけの企画会議でも対話によるコミュニケーションが盛んに繰り広げられているという、唯一無二の空間を持つ駅となっているのだ。

従来、列車待ちの長い時間に見ず知らずの人どうしが語り合えるコミュニケーションの場であった「駅」。そんな駅の機能の再確認に挑戦しているのである。

大量生産と画一化の「マス」の時代に何か大切なものを置き去りにした日本。平田オリザ氏が提唱するように、多様化と個性を認識しあえる「重層性のある社会」を取り戻すためにはコミュニケーションの場を多くつくることが不可欠だ。そのためには、企業だけ、あるいは行政だけ、でなく、高度な知が集積する大学がパイプ役、潤滑油となって連携し、社会に広げていくことが重要である。まさにこれこそが適塾のDNAを持つCSCDの誇れるべき存在意義ではないだろうか。計り知れない可能性を秘めたポテンシャルエネルギーで、ありとあらゆる「コミュニケーション」の輪を「デザイン」していくことで、社会を、この国を進化させていく存在であり続けていただきたいと心から願う。